

男（名前はなんでもよい）
女（名前はなんでもよい）

※男女の年齢は同じ。

教室。ドタドタと二人の男女が入ってくる。

女は初めてのデートに行くような恰好。男も小奇麗な格好で。

男は無理やりに教室に女を引き連れて、窓際に。

女は酷くおびえている。

男は、叫ぼうとする女を抑えようと必死になる。

女 やめて

男 静かに

女 こんなのおかしいよ

男 わかってる

女 女の人に暴力振るったらどんな罰になるか知ってる？

男 知ってるようで知らないがとにかく静かに

女 こんなのおかしいよ

男 わかってる

女 わかっているならなにもしないで

男 何もしないから静かにしてくれ

女 ねえ

男 なんだよ

女 私、帰っていい？

男 だめだ

女 用事があるの

男 嘘はいい

女 思い出したの

男 思い出さなくていい

女 かあさんにね、今度飼うウサギの種類を決めてくれって言われていたの

男 なんとかラビットにしてくれ

女 そういいうい加減なこと嫌いな人だから

男 今日は勘弁してもらってくれ

女 困る

男 俺も困る

女 私、なんにも言わないから

男 だとしても困る

女 困る

男 困る

女 ねえ

男 なんだよ

女 ごめんやっぱりなんとか兎じゃだめだと思う

女、逃げようとする。

男、銃を出す。

女、動きを止める。

女 ねえ

男 なんだよ

女 知ってるよね

男 ……

女 今日、私たちの初めてのデートの日だよ

警察のサイレンの音

男 伏せろ

女、身をかがめると同時に、男は窓から外を見る。

男 わかってるよ

音楽、中島みゆき「タクシードライバー」

男、静かに歩き出すと、自分の人生を歩くようにステップを始める。

女、段々と男に誘われて、二人でステップを踏み出す。

物静かに、段々とほほ笑むように。

『土砂降りのパ・ド・ドウ』

土砂降りの音

女 二日前、予告なしの土砂降りの中、バス停の待合室に逃げ込んだ。同じタイミングで、私の隣に男性が走り込んできた。

女、男、濡れた服を拭いていると

女 六番？

男 ？

女 六番だよね？

男 あ

女 私「◎◎だよ」

男 ◎◎か

女 え？え？

男 ・・・久しぶり

女 それから雨が上がるまで何度もバスが通り過ぎるのを他人事のようにして、六番と話し込んだ

男 その六番ってやめろよ

女 えー だって今更「〇〇」とか言えないし

男 でもな

女 今でも続けているの？

男 ・・・うん、まあな、社会人でな

女 ええええ 今度試合観に行くよ

男 いいよ 来なくて
女 昔みたいにもた応援したい
男 恥ずかしいからいいよ
女 嬉しかったくせに
男 中学生と今じゃ違う
女 同じ顔してるよ
男 渋みが増したろ
女 うん
男 ……時間だな
女 あ、ねえ、連絡先交換しようよ
男 食事にでも……
女 さん？
男 飯でも……
女 ……
男 ……いや、なんでもない 行くよ
女 あ、連絡先
男 ……うん。二日後、時間空いてないか？
女 空いてると思う
男 ペンあるか？

女、鞆からボールペンを
男、女の手には電話番号を

男 明後日、もしも空いていたら連絡して

男、走り去っていく。

女、自分の手を見る。そして、窓際を見ると、

—現在—

男、窓際から外の様子をじっと見ている。

女 六番は、手配犯なの？

男 平たく言うと

女 自首しよ

男 いやだ

女 手伝うよ

男 なにを

女 諸々

男 例えば

女 「違います！この人は何もしてないんです！無実なんです！」

男 嘘くさい

女 なんの罪？

男 教えない

女 重罪？

男 たぶん
女 万引き？
男 もっと重い
女 ポン引き？
男 微妙で分からない
女 事実と向かいたくないときあるよね
男 あるよね
女 ・・私、どうなるの？
男 まさか出会って早々に警察に見つかるなんて思ってもなかったから
女 あるよね そういうタイミング
男 あるよね
女 重なる偶然、度重なる不運、
男 少し静かにしていてくれ
女 無理
男 ・・
女 無理だよ こんな状況、経験したことないもん
男 鳥茂
女 え？
男 行こうと思っていた焼き鳥屋
女 人気店だね？
男 予約なんて取れないって聞いていたけど、試しに掛けたら今日のお客さんが全て予約キャンセルになって
女 あるのそんなこと？というか大丈夫なのその店？
男 人気店

女 そんなお店で良かったの？え？行こうとしていたの？
男 していたよ
女 あったんだ デートする気
男 あったよ
女 警察に追われているのに？
男 警察に追われている人はデートしちゃうだめなの？
女 ダメだと思う
男 少し、静かにしてくれ 考えたいんだ
女 ダメだよ そんなてきとうにデートのこと考えたら
男 鳥茂だめかな？人気店だよ
女 人気店とか問題じゃないよね
男 ファミレスとかのが良かった？
女 絶対ダメ ファミレスとかセンス問われるよね 初めてのデートだよ 打ち合わせじゃないんだよ
男 ごめんなさいね 謝るからとにかく静かにしてもらるか
女 自己中過ぎるよ
男 お店の予約してそんなに文句つけられると思わなか
女 お店の話じゃなくて 警察に追われながらデートしようと思うその気持ち分からない
男 そりゃあごめんなさいね
女 挙句の果てにこんな教室に押し込んでさ 一体どういうつもりなの？
男 仕方ないだろうデート開始早々に終了ホイッスルが鳴るなんて思ってたんだから
女 そんなの当然でしょ
男 あーもう いい加減にしてくれ！！！！

女 ！？

男 あ・・・

女 ・・・ごめんなさい

男 あ、いや、違う

女、静かになり、泣き始める

男 ごめん、違うんだ 色々と事情があつて でもそんなに本気じゃ無かつたら ◎◎は

女 (泣きながら) 今日はず、六番と会うからさ、仕事も家事も全部中途半端にしてさ、美容室行ってさ、「今日はどこかへいくんですか？」

「えーべつに、どこにもいきませんよ」「そうですか」「でも、どこへいってもミランダカーと勘違いされるような髪にしてください」

とか言つて、服も○○で買ってさ、エステもなんとかギリギリで間に合わせてさ

男 すげえ気合い入つてたんだな

女 入つてないよ たまたまそういう日だったただだよ

男 話がかみ合わないんだけど 泣くなよとにかく ごめんな ごめん

女 じえんじえん女心が分かつてないよ なんだよ久々のドキドキを返せよ (泣く)

男 とにかく、先ず、俺の話をちゃんと聞いてくれ ちゃんと説明するから

女 単刀直入に聞くけどさ

男 はい

女 強盗？

男 違う

女 本当のことを言つて

男 ・・・

女 六番、変わらないね

男 変わらないよ
女 いつも大事なことは言わなかったよね
男 覚えてない
女 じゃあ、なんで変わってないって言えるの
男 生き方だよ
女 あのさ、私らまだ◎◎代だよ。変わるわけじゃないじゃん。むしろ出来上がってもないよ
男 とんでもないきっかけでもない限りさ。変わらないよね
男 殺人
女 変わるよ。そんなことしたら変わるよ
男 変わらないよ
女 変わるよ。そんなことしたら変わる。人は変わる。六番は変わってないってことは
男 殺人
女 は、除外だね
男 未遂
女 (泣く)
男 なに？
女 よかったあ。未遂なんだね？殺人じゃないんだね
男 あのさ、人の話を聞いているのか聞いてないのか明確にしてくれないか。メトロノームとにらめっこしているんじゃないんだからさ
女 (笑う) メトロノームとにらめっこなんかしないよ (泣く)
男 泣くか笑うかどっちかにしろ！
女 (怒る) しょうがないでしょ！こんなわけわからない状況でどうやって感情安定させたらよいか分からないんだから！
男 わかった。わかったから大きな声出さないで
女 こんな廃校寸前の学校の教室なんて怪しくて誰も来ないわよ

男 だとしても大声出すのはやめてくれ、俺も色々と考え中なんだ
女 大体考え中考え中ってちゃんと状況説明くらいしなさいよ
男 その隙を与えないくらいに間髪入れずに話し込んでくるの◎◎だよな？
女 ？
男 間髪入れずに話し込んでくるの◎◎だよな？

女、信じられないという顔

男 がっかりする前に認めてくれよ
女 やってらんない 帰る

男 ちよつとまってちよつとまって今出たらやばいよやばいよ

女 やばくないわよ別に誰にもこのこと喋らないし 恥じただけだし

男 恥じってなんだよ

女 恥でしょ？昔の同級生に出会ってちよつと楽しくなってこっそりドキドキしながらデートに来てみたら相手が警察に追われていて拳銃

男 向けられましたって、どんな低俗なドラマの設定よ 嘘くさくて誰にも本気にすらしてもらえないよ

男 本当のことならちゃんと信じてもらえる

女 信じてもらえるわけないでしょ 無実の罪の訴えじゃあるまいし

男 無理か

女 え？無実なの？

男 いや、殺意はあったし

女 殺意だけ？殺意の話なの？私なんて毎日上司に殺意抱いているけど、それって殺人未遂なの？ならないよ そんなの罪になったらツイッターのアカウントの分だけ罪人がいることになっちゃうよ

男 そんな殺伐としてないでしょ

女 してる 私のタイムラインにはほとんど殺意しかツイートされないよ

男 どんな奴らフォローしてるんだよ

女 とにかく いいの 私のツイッターのことなんていいの 無実なの？どうなの？ちゃんと

男 教えるから静かにしてくれ！

女 ……はあ

女、ため息をつきながら、

男 なに

女 そこ、座ってもいい？

男 窓から見えないところにな

女 ここ二階だよ そんな簡単に見えないよ

男 いいよ

女、携帯のライトで

女 お化けだぞ

男 どわあああ

女 (笑う)……六番に人が殺せるわけないか…

男 ライト消してくれよ

女 いいよ。(ライトを消す) 話をしても。

男 ……

男、女の隣に座る。

男 社会人になった。野球バカだったけど、才能は無かったようで結局野球以外のことを考えてこなかった俺は、働き口もちやんと見つければ、転々とあちこちで働いていた。社会人というか、半社会人だった。中途半端な自分に毎日イラつきながら、趣味で野球を続けていた

女(上司として) え、パソコンも使えないの？大丈夫ちよつと？若いんだからさ、もつと柔軟に生きなよ そんな堅物みたいな人 どこでもやっつけていけないよ

男 上司は俺の年下女性だった

女 ちよつとくなにやっつてんのよこれ

男 工場下請けのルート営業をしていたが、主に事務管理だけで外に行くことはなかった。毎日上司の女が「私のおかげで食べているのよあんたは光線」を発し続けて、俺のプライドはずたずたになっていた。

女 段ボール箱作るのにどれだけかかっているのよ もう使えない男

男 プチンと音がした。ダメだ、ここを辞めよう ここでも俺は持たなかった それだけだ

女 いま、辞めてやるとか思ったでしょ

男 いえ 思っていないですよ

女 ダサい

男 え？

女 中途半端なことばかりしているから年下の女にまで下に見られるんですよ もつとしゃんとしなさいよ

男 笑顔が張り付いていた。いつ身に着けたのか分からないが、俺の顔にべったりと張り付いていた仮面の下で、もぞもぞと音がしているのが分かった。

女 別にいいんだけどさ。でも、私、あなたとは付き合わないね 何があっても。なんか、セックスも下手そう

男 ははははははは

女 ははははははは

男 ……こんな毎日が続いていくにつれて、ストレスがかさんだ。毎日走り込みをしていた。ジョギングをして、汗を出せば忘れられる。だから、俺は毎日毎日ジョギングをしていた。ある夜、いつものジョギングコースに車が突っ込んできた。俺はとっさによけた筈なんだけど、逃げきれずにひかれてしまった。気が付くと病院だった。

女 (看護師として) あ、気が付きましたか？足の骨折だけで、命に別状はありませんよ。良かった。お財布から緊急連絡先には連絡していただいたので

男 すみません 会社に

女 会社の方が一人お見舞いに来るそうですよ

男 そうですか こんな遅くに？

女 ええ

男 誰だろう・・・あ、

女 安静にしてくださいね 薬がまだ残っているので・・・

男 むにやむにや

女 (上司として) おい起きろよ

男 え

女 起きろっていつてんだよ

男 あ

女 あじゃねえよ

男 すみません、こんな遅くに

女 お前、◎社の配達物に送付状付け忘れたろ

男 え？

女 そういうの恥ずかしいからやめろよな 基本がなってないんだよ 社会人として

男 もしかして

女 もしかしてなに？頼んでいた見積もり出来た？まだメール来てないみたいなんだけど

男 まだ です

女 そうなんだ 期待した私がバカだった。あ、一万貸して、退院してきたら返すから。これ、財布から抜いておいたから。それじゃね。

男 これから出かけるんですか？

女 三門町のバーに行くの。三時までやってるからね。狙っている男子君がいるんです。

男 上司はそれだけ言って帰っていた。俺はしばらくして、病院内が静かであることに気が付いた。うす暗い院内で、ふと考えてみた。そしたら、

女 (女として) そしたら？

男 走ってた

女 え？

男 病院を抜け出して、走ってた。

女 まさか、女のところに？

男 会いたくて仕方なかった 笑顔だったよ 笑顔で上司のいる店に向かって走っていたよ

足は骨折していたから、もうぐちゃぐちゃな気分だった。それでも走った。

そして、着いた早々に、店から出てきた上司に出くわした。酔っぱらいの彼女の頭をゴツンと殴り、折り返した。

俺はすぐに病院まで走っていった。

女 まさか、それで・・・

男 翌日、警察が来たよ。でも、まさか入院したての人間が被疑者になるわけもなく、事情を聴かれて終わったよ。

女 その上司は？

男 酔っぱらって歩いている最中に車に引かれて死んだらしい。

女・・・嘘、え、でも、それなら疑われてないんじゃないの？

男 病院に戻っているとき、なんだかホームラン撃ったあとの爽快感を感じたよ。ゆっくり、悠々とホームベースに帰るように、病院に入っ
ていったんだ。俺は、多分、ホームランを打ったのだと思うよ。

女 でも、警察は車に引かれたっていったんでしょ。

男 どうかな、違うんじゃないかな。
女 それでどうなったの？
男 全然治らない足と過ごしている内に、自分の本当の顔に出会ったんだよ。
女 本当の顔？
男 うん、俺にはもつとできることがあるんじゃないかって。それで、
女 それで？
男 ・・・タクシーの運転手になった
女 へ？
男 女上司を引いたタクシーに感謝したわけじゃないんだけど、偶然にそうなった感じだけど、
女 毎日タクシーに乗りながら、もしかしてこの車がその上司をひき殺した車なんじゃないかなと思いつつながら
男 ある時ね、ごつい人たちが乗り込んできた時があつてね。その人たちが袋を一つ置いていったんだ
女 お金？
男 いや、これだよ
女 拳銃？？
男 そう。持った時にさ、ぞくつとしたんだよね。それで隠し持つようになった。
女 ・・・ヘビー
男 ヘビーかな
女 どうして警察に追われるようになったのかは、まだ聞けてないよね。
男 その拳銃で
女 待つて 覚悟が必要な気がしてきた
男 そうかな どうかな どうだろう
女 どうなの？

男 お客さんには質の悪い人もいてね、喧嘩になったんだ。
女 まさか
男 反射だった。拳銃出したら、「そんな偽物」って言われて、頭にきて、つい。当たらなかったんだけどね。
　　もう、真っ白になった。車を置いて逃げるしかなかったよ。
女 それ、いつの話？
男 ……◎◎とバス停で会った時の話
女 ……
男 ……
女 おしまい。
男 え？
女 ヘビー過ぎるよ
男 おしまいつて？
女 デートはおしまいつてこと
男 冷めた？
女 冷めるでしょう 普通
男 そうだよな・・・なら、
女 え？
男 人質になつてくれないか？
女 罪を重ねるの？
男 まださ、ちゃんとした罪を犯してないんだよね
女 なにそれ
男 中途半端でさ
女 だから私を人質にして、誰から何をもらうの？

男 そうだな・・・歓声
女 やだよ そんなの
男 そうだよな。冗談。
女 どうして、デートの相手の人質にならないといけないの？六番さ、もっと考えて行動しなよ
男 考えているよ でも、
女・・・そ。

サイレンが鳴る。

男 え？
女 なに？
男 パトカーだ 入り口に来た
女 うそ
男 バレたんだ・・・
女 どうするの？
男 逃げられる感じがしないね
女 自首しよ 一緒にいくよ
男 いやだ
女 なんて
男 なんか
女 なんか？
男 モヤモヤするよ このままじゃ。区切り悪くて
女 区切りく???

男 本当にお願いでいい？

女 なにを

男 人質・・・

女 ・・・

女、立ち上がると、窓に向かっていく。

女 いつも教室の窓から外を見ていたな。放課後はなんだか映画見ているようだった。

六番はいつも野球ばかりしていたから、私はいつも彼の背中ばかり見ていた。

試合はいつも応援しにいった。自称野球好きということにして、友人と一緒に。

六番は格好良かった。無口で、何を考えているか分からないけど、試合や練習の時に、とても大きな声で笑うことがあって、その大口開けている姿が目には焼き付いていった。

困ったのはバレンタイン。あの野球バカに何をどうやっていつ渡せばいいんだろうって至極悩んだ。

神様はいたらしく、彼に捻挫をさせてくれた。これみよがしに、各教科の先生が彼に宿題を出し、

六番はいつも居残り勉強していた。私は、後ろの席で友人らと喋っているふりをしてながら、

背番号の無い彼の背中を見続けていた。立ち上がった。友人たちから拍手が上がった。

私は、チョコをむんずと持って、六番の背中めがけて・・・つい、投げつけてしまった。

自分でもどうしてあの時投げつけたのが意味が分からなかったけど、彼の背中にチョコが当たった。

こちらを振り向いた六番は、「いってーなー」と言いながら「お、チョコ！ラッキー」と言っ

私を見た。「サンキュー」と背中と言いながら、また慣れない勉強をしていた。

興奮だった。六番とのこのやり取りは、以後も友人たちの間で語り継がれていった。

だけだった・・・その後、ホワイトデーに何があるわけでもなく。普通に卒業式を迎え、普通に離れて、普通に時が経っていった。

女、窓を見ながら。

女 人質、やってみつかないかな

男 え？

女、窓を開けて

女 きゃああああ たすけてえええ わたしーっつかまっています 凶悪犯はここでーす 命だけはー あー命だけはー おーたすけて

男 俺、普通じゃないね

女 私も普通じゃないね

男 ありがとう

女 いいえ どうしたらいいの？

男 ちよつと、後ろから羽交い絞めした振りをするから、そのまま窓際に
女 わかった

男、女を羽交い絞めにした振りをする、そのまま窓際に

男 こらてめーえら それ以上近づくとこの女が痛い目あうぞ

女 きゃああ 助けてー

男 身代金持ってこい

女 うちの人が困るでしょ

男 親御さんに迷惑かけらんないか わかった えーと

女 おやごさんじゃないよ 旦那

男 あ、そか旦那か

女 そんなにうちお金ないんだから

男 ごめん え？え？？？？？？？？？？ダンナ！

女 ・・そ、旦那

男 ちよつとまって

女 バレるからちゃんとやって！

男 あ、ごめん、え？旦那？

女 きゃああ ごめんなさい

男 10分待ってるや！！

男、女を連れて教室の真ん中に

男 旦那いるの？？

女 ごめんね 言い忘れていた

男 わけないよね？わけないよね？デートだよ？普通旦那いないよね？

女 普通よ

男 あああああ よくわからないなあああ

女 なに盛り上がってるの

男 盛り下がってるの 山から下りていったら、急だと叫ぶでしょ？

女 失礼

男 失礼ってこっちのセリフだよ？

女 旦那がいるからって何かがなくなるの？

男 社会性とか倫理観とかなくなるよね？

女 いま、あなたのやっていることは社会性とか倫理観とかなくなるらない話？

男 そうじゃないよ 先にそれやってるでしょ

女 全然言っていることの意味が分からない

男 いや、なんか、ちよつとき、

外から

「中にいる男性に告ぐ。ただちに、女性と一緒に外に出てきなさい。今ならばまだ罪は軽いぞ」

男 取り込み中だよ！それどころじゃないよ！

女 せっかく恩赦してくれているんだから出ていきなさいよ

男 そうでなくてさ

女 九回裏のツーアウト二塁三塁 選ぶならなに？

男 デットボールだよ

女 ヒット打てばいいの

男 何の話だよ

女 チャンスでしょ！

男 チャンスっていえよ！まどろっこしいな

女 はまどろっこしいの

男 わかんねえよ！

「中にいる男性に告ぐ。ただちに、

男・・・はあ
女 ため息ついている時じゃないよ 早く
男 なんか、だめだ
女 何が
男 なんか だめ
女 だから何が
男 本当に俺って、中途半端だなんて
女・・・もう、ごめんって
男・・・いつ
女 え？
男 いつ結婚したの？
女・・・去年
男 ほやほやだ
女 ほやほやです
男 それでなんで俺と今日
女・・・この前ね、言われたんだよね とある人に
男 なんて
女 すごく、響いちちゃってさ
男 だからなんて
女 男と女なんて、互いにステップ踏んでいるようなもんですよね って。
男・・・
女 パドゥ ドゥ っというんだって 男女のステップのこと バレエで。

男 …… どうしてそれが響いたの

女 …… 私、今の旦那とは、パドウ・ドウしてないなって

男 …… そか

女 それでモヤモヤしていたらさ、会っちゃったんよね だからつい

男 …… なんかごめん

女 ううん

男、窓際にいく。

女 踊ろう

男 いいよ

軽快な曲

女 彼と会ったのはクラブだったかな 激しく酔っぱらっていて、正直、なんで彼と踊っていたのかは忘れた

男 俺達、多分、きつといい夫婦になれるよ

女 気が付いたら指輪を渡されていた

男 じゃあ、仕事に行くから

女 いったらっしゃい って言う朝の日課と、クラブの思い出が繋がらない

男 ただいま おやすみ それじゃいってくるよ ただいま おやすみ それじゃいってくるよ

女 奇妙な歌詞が毎日繰り返される。ああ、そか、これが日常か。気が付いた。手に入れたのは日常だったんだ。

非日常なところで私は日常を手に入れたんだ。ん？なんか変だぞ。私は、いつ日常を欲しがったんだろう。

あれ？どれ？どこ？いつ？そんなことを考えるようになったら、なんだか毎日が嘘くさくなった。

男 ストップ。

女 え？

男 男と女の中にはそれなりドラマがある筈だ。たぶん、今は、それを忘れただけだよ。

女 ワンクールすぎちゃったのかな

男 2があるよ 人気作なら。

女 そうだよ

男、席に座る。

男 毎日、視線を感じていた。応援される声を楽しみにしていた。時折、俺は役者なのかなって錯覚していた。

女 おい六番、昨日のダサイ守備はなんだよ

男 ヤジも楽しかった

女 おい六番、マクドナルドいこうぜ

男 恐喝もされた

女 おい六番、怪我は大丈夫か？

男 心配もされた

女 おい六番、あれってランニングホームラン？エラー？

男 うるさい ホームランでいいだろ

女 大切なことだよ スコアどうなってるの？

男 スコアはエラーだけど、

女 エラーかよ

男 でも、ホームランだよ

女 人生初のホームランかと思ってジュース買ってきたけど要らないな

男 いるよ

女 ぶしゅー ごくんごくん

男 こいつはまったく・・・そう思いながら、いつも視線と声を楽しんでいた。俺の中の日常は、非日常で溢れていた。でも、学校を出るとそうはいかなくてな。

女 六番

男 俺は、

女 六番

男 俺は、

女 六番

男 俺は、六番でずっといたかった。いつの間にか、背番号が外れていた。社会は俺を名前で呼びだした。

女 ◎◎さん

男 俺は、六番じゃなくなった

女 (回想) 六番!!!

男の背中に何か当たった

女・・・

男 いてええなあ

男は、前を向き。ガッツポーズをしていた。女にはそれは見えない。

男 ◎◎◎

女 なによ

男 先の将来にもう何の希望もないって思った時にさ、一番盛り下がった時にさ、悪いんだけど、
女 なによ

男 デートで渡そうと思ってたもの

男、ホワイトデーのお返しを。

女 ほんと、何考えてるか分からないよね。背中であらゆる話されると思ったら大間違いだよ

女、男からそれをもろう。男、窓際にいく。

男 日常はこれでおしまいだ。

男、窓を開く

男 おーい！

女 なに終わり？？早くない？

男 もういいよ、よくわからないしこの状況

男、女を振り向いた瞬間に、銃声が一つ。男、背中を撃たれる。

女 え？

男、よろめきながら、壁にもたれかかる。

やけっぱち騒ぎは のどがかれるよね
心の中では どしゃ降りみたい
眠っても眠っても 消えない面影は
ハードロックの波の中に 捨てたかったのにね

笑っているけど みんな本当に幸せで
笑いながら 町の中歩いてゆくんだろうかね
忘れてしまいたい望みを かくすために
バカ騒ぎするのは あたしだけなんだろうかね

※タクシー・ドライバー 苦労人とみえて
あたしの泣き顔 見て見ぬふり
天気予報が 今夜もはずれた話と
野球の話ばかり 何度も何度も 繰り返す※

酔っぱらいを乗せるのは 誰だって嫌だよね
こんなふうに通の真ん中で泣いてるのも 迷惑だよね
だけどあたしは もう行くところがない
何をしても 叱ってくれる人も もう いない

(※くり返し)

男
なんだかなあ
・
・
・
中途半端なんだよなあ
・
・
・
音楽なり始める。
スモーク、女が騒いでいる中、人々が出てきて男を取り押さえていく。女、歌を歌い始める。

男 あれえ 今日酔っぱらいですか

一番を女が謡い、終わると、タクシーの帽子をかぶった男が座る後ろに、
女がやってくる。

車のガラスに額を押しつけて
胸まで酔ってるふりをしてみても
忘れたつもりの あの歌が口をつく
あいつも あたしも 好きだった アローン・アゲイン

ゆき先なんて どこにもないわ
ひと晩じゅう 町の中 走りまわっておくれよ
ばかやろうと あいつをけなす声が途切れて
眠ったら そこいらに捨てていっていいよ

タクシー・ドライバー 苦労人とみえて
あたしの泣き顔 見て見ぬふり
天気予報が 今夜もはずれた話と
野球の話ばかり 何度も何度も 繰り返す
タクシー・ドライバー 苦労人とみえて
あたしの泣き顔 見て見ぬふり
天気予報が 今夜もはずれた話と
野球の話ばかり 何度も何度も 繰り返す

女 うーん、酔っぱらいですね
男 そうですか
女 ねえ運転手さんは恋したことありまふか？
男 恋？？あるかなあ
女 生活は楽しいでふか？
男 どうかなあ・・・音楽で例えたら、間奏かなあ
女 お 二番来るのね
男 いやあ、ずっと間奏が続いている感じかなあ
女 いやだああああ 盛り上げてええ
男 そうですね あ、パドウ ドウってご存知ですか？
女 ば ど？
男 男女がね 二人でするステップですよ
女 へえ なにそれ
男 恋してたのかな たぶん、そいつと
女 うらやましいい
男 日常でするステップは、盛り上がり欠けるけど、
女 ？
男 いつか、盛り上がったらいなって 思い続けられる

幕

